

**TruPhase の追加導入(6)**  
**—SACD の位相チェック—**

1. はじめに

前報(3)までに設置と動作確認が終了しましたので、目的とした SACD の位相チェックを行っていきます。

2. TruPhase の試聴方法

前報(1)で報告した SACD のシステムで SACD 再生を実施し、音質と位相反転の効果を確認します。接続ケーブルやボリュームの設定あるいはアクセサリーの追加は、前報(1)と前報(2)のとおりです。

SA11-S2 による SACD 再生 (バランス接続)

SA11-S2(\*)→TruPhase B→TruPhase A→300B シングルアンプ

\*GPS-777 より 176.4KHz クロック入力

使用した SACD は下記のものです。

**ESOTERIC ESSD 9016**

マニュエル・ド・ファリャ 三角帽子

エルネスト・アンセルメ指揮スイスロマンド管弦楽団

**SRGR 717**

ヨハネス・ブラームス 交響曲 4 番

ブルーノ・ワルター指揮コロンビア交響楽団

**WARNER CLASSICS WPCS-13849**

フレデリック・ショパン ピアノソナタ第 2 番変ロ短調「葬送」

ルートヴィヒ・ファン・ベートーヴェン ピアノソナタ第 29 番変ロ長調

「ハンマークラヴィーア」

ベアトリーチェ・ラナ (ピアノ)

**WARNER CLASSICS WPCS-13850**

ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト

ピアノソナタ第 11 番・第 8 番・第 14 番

幻想曲ハ短調

ユンディ (ピアノ)

**ドイツグラモフォン USGG-9536**

アントン・ドボルザーク チェロ協奏曲ロ短調

ロココの主題による変奏曲

ムステイスラフ・ロストロポーヴッチ (チェロ)  
ヘルベルト・フォン・カラヤン指揮ベルリンフィル

### 3. TruPhase の試聴結果

ファリャの三角帽子は、1961年録音のハイブリッド盤ですので、SACD層を再生します。手持ちのアナログ盤と同じマスターからのSACDのようです。TruPhase Bで位相反転させますと、散漫な音が中央に凝縮し、定位がしっかりしてきます。これまでは、ESOTERICリマスタリングのせいで鳴らしにくい盤のように思っていたのですが、こうやって位相反転を行いますと、打楽器の立ち上がりや低音の締めりなどもしっかりしてきます。

ブラームスの交響曲4番は、1959年録音のSACD層のみの盤で、手持ちのアナログ盤と同じマスターからのSACDのようです。TruPhase Bで位相反転させますと、散漫な音が中央に凝縮し、定位がしっかりしてきます。これまでは、録音も古く鳴らしにくい盤のように思っていたのですが、こうやって位相反転を行いますと緻密で繊細な表現が出てきます。

ショパンとベートーヴェンのピアノソナタは、録音は2023年の新譜のハイブリッド盤ですのでSACD層を再生します。TruPhase Bで位相反転させますと、広がり感がでて音が散漫になり、定位がぼやけます。「葬送」、「ハンマークラヴィーア」ともお馴染みの曲で、ラナが曲によって弾き方も変えており、ダイナミックレンジの大きさもよく分かります。

モーツァルトのピアノソナタは、ハイブリッドですのでSACD層を再生します。録音年代は不明ですが、2024年発売の新譜のようです。お馴染みの曲ばかりですが、TruPhase Bで位相反転させますと、広がり感がでて音が散漫になり、定位がぼやけます。ピアノの音は柔らかく美しく、スタンウェイではないようで、ベヒシュタインかもしれません。

ドボルザークのチェロ協奏曲は、1968年録音のSACD層のみの盤です。現有のアナログ盤やMQA-CDと同じマスターからのSACDのようです。TruPhase Bで位相反転させますと、散漫な音が中央に凝縮し、定位がしっかりしてきます。

アナログマスターが同じと思われる、上記のファリャの三角帽子、ブラームスの交響曲4番、ドボルザークのチェロ協奏曲も位相反転した方が良いので、SACDもアナログマスターの位相特性を継承しているようです。

### 4. まとめ

SACDでも録音年代やレーベルによって位相反転を行う方がよいものがあることが分かりました。SA11-S2もこれまでバランス/アンバランスケーブルでの出力でしたが、バランス出力にするとよいことも分かり、録音の古いブラームスの交響曲から

新譜まで、GPS クロック入力やヴォリュームアキュライザーにも助けられて、ようやく SACD の真価を発揮させるようになりました。

以上